
19世紀後半のセイレーン図像 —フレデリック・レイトン《漁夫とセイレーン》を中心に—

セイレーンは、紀元前8世紀の『オデュッセイア』に登場する半人半鳥の女性の怪物で、歌声で船乗りを誘惑し命を奪う。本発表では、まずセイレーンの姿やイメージの変遷を示す。『オデュッセイア』以降の物語の記述ではセイレーンの姿形、由来などが語られ、セイレーンはそれに忠実な姿で描かれたが、時代が下るとそのイメージは人魚の姿へと変貌した。そして19世紀後半に入ると主題の面でも変化があり、『オデュッセイア』の物語を典拠としない作品が描かれるようになった。これは、セイレーンが誘惑に失敗する物語の場面を典拠とすると、男性がセイレーンに誘惑されて死ぬ場面を描くことができなためであったと考えられる。またこの時代には、人間の女性の姿で描かれるセイレーンも出現した。これらのことは、セイレーンのイメージの概念が神話上の異形の怪物から、水辺で男性を誘惑し命を奪う女性へと拡大していることも示している。

1856年から58年に描かれたフレデリック・レイトンの《漁夫とセイレーン：ゲーテのバラッドより》は、ローレライ伝説に基づくゲーテの詩『漁夫』を典拠として描かれたが、この作品は、ロイヤル・アカデミー展に出品されたタイトルに「ゲーテの詩を典拠とする」という事が明記されているにも関わらず、セイレーンが人魚の姿で描かれていることや、セイレーンが直接男性を水中に引きずり込もうとしている点など詩の記述と異なる部分がある。作品中の漁夫とセイレーンそれぞれのポーズの源泉として、ミケランジェロの《ピエタ》やジョージ・フレデリック・ワッツの《人生の幻》、フランチェスコ・フリーニの《ヒュラスとニンフたち》などが指摘されている。

レイトンの作品は、セイレーンが男性を直接水中に引きずり込もうとする図像の先駆的役割を果たしたと考えられる。レイトンはフリーニの《ヒュラスとニンフたち》からセイレーンのポーズだけでなく、その主題である『アルゴナウティカ』のヒュラスの死の場面に登場するニンフたちがヒュラスを水中へ引きずり込む要素も取り入れて描いたのだと考えられる。

また、《漁夫とセイレーン》は先行研究において世紀末のファム・ファタル流行やミケランジェロを源泉とするレイトンの男性裸体画への傾倒といった文脈の中で捉えられて来たが、発表者はこのセイレーンと漁夫の男性の首に女性がすがりつくポーズを、レイトンの《モンタギュー家とキャピュレット家の和解》やアリ・シェフェールの《フランチェスカ・ダ・リーミニ》に描かれたような、愛し合う男女に訪れた悲劇の死をほのめかすものであると考える。男性を溺死させるおぞましい怪物ではないセイレーンのイメージは絵画だけでなく、アンデルセンの『人魚姫』など文学においても世紀後半にみられるようになる。このようにレイトンの《漁夫とセイレーン》はセイレーンのイメージの変化の過程を示す作品として位置付けられるのである。